
女の子の可愛すぎる仕草 20パターン

水守中也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女の子の可愛すぎる仕草 20パターン

【Nコード】

N1034V

【作者名】

水守中也

【あらすじ】

タイトルどおりのネタ小説です。ライトノベル作法研究所に投稿した作品です。

「食べなよ」

大学の新生歓迎コンパのとき、隣に座った女の子にえらく真剣な顔でボソツと言われた。

「あ、ああ……」

それが俺と萌の出会いである。第一印象は無口で少し変わった女の子だった。後から萌に聞くと、「うーん」と右手ひとさし指を下唇に当てて思い出そうとしていたが覚えていないみたいだ。実際は無邪気な明るい性格で、あのときは酔っていたのだろう。

そんな出会いから一年。俺と萌はゼミ室で二人きり向かい合わせに座って、共同レポートに取り掛かっていた。

「はうゝ……><」

萌は猫みたいな伸びをしてから、あくびをした。

「眠いのか？」

「うん。ちよつとね。あ、そろそろ時間だ」

「2限、講義だっけ？」

「うん」

萌はうなずくとメンソールのリップを取り出して口に塗り始めた。さっきまで俺の前にいた萌がノーメイクかといえばそうではないのだが、講義に出るのは別なのだろう。化粧するところや無防備な素顔を俺の前にさらしてくれるというのは、どこかうれしい。けれど、マスカラを塗るとき口をばけーと開く姿は、間抜けだと思う。

あまりじろじろ見ていたら失礼なので、レポートに集中する。ふとちらりと萌をのぞき見たら、右の耳から取り出した綿棒を左の耳に入れ替えていた。

綿棒まで持ち歩いているのか？ 女ってよくわからない。

「それじゃ行つてきまーす」

「いつてらっしやい」

簡単に身支度を終えて、萌が部屋を出る。講義のない俺はそのままゼミ室に残って萌を見送った。

「くそー。なんでこんなに時間がかかるんだよ」

論文のことで教授に質問に行ったら、やたら長話のうえ教授が担当する講義の手伝いなどさせられてしまった。解放されたのは、とつくに2限が終わっている時間である。ゼミ室に戻ると、萌は机に突っ伏して寝ていた。暇だったのか、黒板に漫画のキャラクターと思われる芸術的な落書きがしてあった。

「……こりやまあ見事な力作だな。俺としては、少しでもレポートを進めてほしかったけどな」

どついてやりたくなっただが、気持ちよさそうに寝ているのでやめた。俺は萌を起こさないようそつと向かいの席に座る。その寝顔は愛らしい。思わず見とれそうになって……気づいた。こいつ、狸寝入りしてやがる。

俺は萌の無防備なおでこにデコピンしてやった。

「痛っ。もお、主人公くんが入ってきたのを見たからちょっとお茶目したのに」

「やかましっ」

「でも、少しは本当に寝ていたんだよ」

萌は眠気覚ましか、目薬を差してぱちぱちと瞳を瞬かせると、口にゴムをくわえて、乱れた髪の毛を結ぶ。

「いや、寝てたんなら寝てたで、作業を進めとけと言いたいんだけど」

俺は教授から受け取った資料を机に並べて、課題に取り掛かる。けれど萌は作業を始めることもなく、顎をチョコンとテーブルにのせて、ぽけーと俺の手元を見ている。

「体調でも悪いのか？」

「そ、そんなことないよ」

などとやりとりしていたら、萌の携帯が鳴った。会話の内容からすると、男友達のような。首を若干傾けて楽しそうに談笑している。それほど体調悪くないようだな、とほっとすると同時に、楽しみに話す萌の姿を見て、なんとなく複雑な気持ちになる。まあ嫉妬つてやつだよな。付き合っているわけでもないのに情けない。俺は資料を取るために席を立った。

「どーしたの？」

電話を終えた萌が、俺の方を向くため背もたれのある椅子に逆向きに座って聞いてきた。もちろん本当のことなんて言えない。気恥ずかしくって無視を続けると、萌も席を立つ。

「おい？ 主人公くん？」

などと、小さい身体をぴよこぴよこ動かして、ことあるごとに無視を続ける俺の視野内に割り込んでくる。まるで猫のようだ。

その萌が急にぴたりと動きを止めた。そして――

「……くしゅんっつ！」

声は可愛らしいけど、腰を大きく折り曲げて大きく息を吐く姿は、とても男らしくしゃみだった。

思わず俺は苦笑いして、結局萌に話しかけてしまった。

「なんか、ヨガフレイムのモーシヨンみたいなくしゃみだな」

「むう……それって絶対ほめ言葉じゃないよね」

萌が心なしに顔を赤く染めて頬を膨らます。

「ソナナコトナイヨ」

ふざけて誤魔化しつつ、ふと思う。先ほどの眠そうな様子や赤い顔。もしかすると……

「萌、風邪でも引いたのか」

「うーん。どうだろ。そんなことより、主人公くんがあたしを心配してくれることのほうが驚きだよ」

そういつて、萌に「熱ある？」と、逆におでこに手を当てられてしまった。

俺ってそんなに冷徹に見られていたのか？

「とにかく今日はもう帰ろうか。レポートも急ぎじゃないしな」
「……うん」

やっぱり無理していたのか、萌は素直にうなずいた。

二人して、散らばった資料を本棚に戻す。身長の低い萌はぴよんぴよんと飛び上がった資料を本棚に納める。資料を取るときもジャンプしていたっけ。

「あ、そうだ。黒板の落書きも消しておかないと」

萌は小さな身体を精一杯伸ばして、右手で円を書くように黒板の端から端まで動き回る。

「どうしたの？」

「いや」

黒板消している彼女の無防備な左手をじっとみつめてしまったのは、秘密である。

帰りの電車、運よく俺たちは並んで座ることができた。

萌はねむけまなこで、ぼーっと座っている。

「萌？」

返事はない。そつと萌の顔を覗き込む。どうやら寝てしまったようだ。俺は萌の長めのカーディガンから出ている指先にそつと手を置いた。

電車が揺れる。萌の身体が俺に寄りかかってきた。柔らかい萌の髪の毛から良い匂いが漂い、鼻腔をくすぐる。しばらくそのままにしておいたら、萌が「ハッ」と目を覚まし、何事もなかったかのようによつくりと体を定位置に戻していく。

その様子が面白くてくすりと笑うと、萌は消え入りそうな声で言った。

「……ごめんね」

「気にするなつて。無理するなよ」

いつもの萌なら、笑われたらむくれるのに、どうも調子が出ない。

つらうつらしながらも体を真つすぐ立てようと努力している萌の
身体を、やや強引に引っ張って囁いた。

「おいで……」

萌は小さく頷き、そつと俺に身体を預けて瞳を閉じた。

（後書き）

良かったら、「食べなよ」の魅力を教えてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1034v/>

女の子の可愛すぎる仕草 20パターン

2011年7月23日03時25分発行